

85th-86th

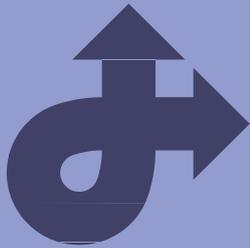
# 新制作

SHINSEISAKU

2023  
会報

新制作協会

vol.80



86回展に向けて 委員長 永津 守

彫刻部の出品者数が減少しているのはデータでご存知だと思いますが、40年前と比べると20代・30代の出品者数は10分の1になっています。デジタル化で動画やゲームに関心がいった若者がアナログ世界である彫刻に興味なくなったのではないかと一度このことを調べたいと思っていたのですが、昨年の4月に某市の市制80周年記念にアートフェスティバルをやる、参加しないかというお誘いがありました。丁度いい機会だ、これをやれば若者が彫刻を作らなくなったかどうか調べられるな、という下心を持って参加しました。



結論だけ言うと、予想を大きく超えて生徒たちは夢中になって彫刻を作りました。ワークショップ後の公民館でやった作家と生徒との展示会の時に取材に来ていた教科書会社の人達が「みんな違った作品作ってますね。今、こんなこと（彫刻を作る）やってる学校、ないですよ。まあせいぜい組み立てキットを作らせるくらいです。」と言ったのですが、この一言で彫刻部の出品者が激減した理由が明らかになりました。物事は皆そうですが、特に彫刻は見るだけではなく自分で作ってみたいとわからないものです。それをやっていないのは子供達の世界に彫刻が存在しないことを意味します。

今年になって今度は県の教育委員会から小学校のワークショップの依頼がありました。以前にはなかった依頼が立て続けに来ました。これは学校・教育関係者が追い詰められているからだと思えますし、それはもちろん日本全体も同じことです。経済発展した国の行く末は歴史を作るほどの先進国になるか没落・衰退していくかの二択だと思いますが、日本は今ヒザ、いや腰のあたりまで衰退の波に洗われているのではないのでしょうか。

我々美術家は世の中の衣食住を満たすことはできません。その後ろめたさ(?) からともすれば社会の片隅でひっそりと展覧会をやっている感じになりがちですが、しかし創造力が何なのかは新制作の会員なら骨の髄までご存知のはずです。この先、日本にとって必要な創造力を提供できるのは私たち美術家ではないのでしょうか。外に出て大いに活動し、また社会の多くの人たちに会場へ来てもらって創造の世界を伝えようではありませんか。

第86回新制作展 “The 86th SHINSEISAKU Art Exhibition”



第86回新制作展は下記の日程を予定しております。

国立新美術館  
(The National Art Center, Tokyo)

2023年  
9月20日(水) - 10月2日(月)  
休館日: 9月26日(火)



- 2023年度委員  
(代表委員会)  
委員長 永津守(彫刻部)  
副委員長 一居孝明(絵画部) 西村俊夫(SD部)  
代表委員  
●絵画部 永田由利子 高堀正俊 緒方和美 矢澤健太郎  
●彫刻部 木方立樹 江村忠彦 左善圭 河西栄二 原田理糸  
●SD部 杉田文哉 岡本奏子 加賀谷建至 大木敦子  
〔合同委員会〕  
●会計委員会 ●図録委員会(図録/広告)  
●美術館担当委員会 ●広報委員会(広告/PR/会報/HP)  
●受賞作家展委員会 ●慶弔委員会 ●美術団体懇話会

各部より

絵画部 永田由利子

コロナ禍に、新制作展の火を消さぬ様に試行錯誤しながら、皆さんの力で進んで来ました。

2020年度は一般出品者によるWEB展。2021年度は会員通常展示、一般出品者は無審査で1点出品。

2022年度の85回展は会員通常通りの展示、一般出品は従来通り厳密な審査をし、展示されました。新制作らしいエネルギー溢れる美しい展覧会となりました。

当たり前と思われた日常が、唯一無二の大切な今なのだと思います。

外に向けては、「85回展バーチャル展示」で絵画部会場をホームページに載せました。

受賞作家展はYouTubeにUpしました。今年はSNSでの発信も進める予定です。

数年の様々な制約から自由になった今年、国立新美術館での86回展はより充実した作品が並び、多くの出品者が応募して下さるのを楽しみにしています。入場者の増加も期待しています。

人と人との触れ合いの場が持てる様になり、3年振りの懇親会を予定しています。孤独な制作の後の華やいだ時間を楽しみたいと思います。

オープントーク、新会員トーク、ギャラリートーク、アーティストトークも従来通り行います。企画展示は創立会員の伊勢正義氏、その他レクチャーなどは未定です。



彫刻部 木方立樹

この数年コロナ禍により我々は社会生活において様々な制約を受けてきました。その経験は身体と精神の調和という極めてシンプルな価値の重要性に改めて気づかせてくれました。

美術表現の中で特に彫刻はフィジカルな分野であると言えます。作者は自らの身体を用いて素材に向き合い、思考を重ね、それぞれの手法で長い時間をかけながら膨大なエネルギーをもって制作を行います。鑑賞者も作品に対峙し空間を共有する事で視覚にとどまらず、その魅力を全身で感じ取るのです。彫刻領域の表現は身体と精神それぞれに働きかける、人にとって根源的な営為なのです。物に触れ、直接に共有する喜びを今であればこそ大切にしたいと感じています。

今回、彫刻部では新たに『35<sup>3</sup>-サンゴキューブ』部門を開設します。空間全体を含めた新たな彫刻表現へのチャレンジの場と位置付けます。これまでの一般作品部門と併せ、彫刻の可能性を追求し、さらに魅力的な場を参加者全員で作りたいと思っています。そしてご来場いただく皆さんとその場を共有したいと思っています。それぞれのエネルギーを感じ取ってください。



スペースデザイン部 杉田文哉

「SDGs」という言葉をメディアでよく見聞きするようになりました。(Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標)つまり世界中の様々な国で起きている環境問題(気候変動)・貧困・紛争・人権問題・感染症問題など多くの課題を2030年までに解決するための計画・目標のこと。

「持続可能な・・・」という部分は、「サステナブル」とも言われていますが、人間の活動が自然環境に悪影響を与えず、その活動を維持できることを意味しています。昨今は様々な取り組みが取り上げられていますが、アートの世界でも重要なテーマだと考えます。

スペースデザイン部では「空間に関するあらゆるデザイン作品」を対象とし、一般審査とミニアチュール審査の2部門で公募しています。

作家の中にはこのサステナブルをテーマに廃棄素材を再生し、新たな作品表現として展開している方もいます。

特にミニアチュール部門では様々な実験的作品が観られます。デザインされたその発想の豊かさや素材の新たな位置づけが魅力です。

昨年85回展では会場を構成するパーティションの位置を変えたことで、抜けのある心地良い空間が生まれました。

多様なジャンルの表現作品がこの空間に集まることを楽しみにしております。



## 第85回新制作展

### 審査陳列報告

#### 絵画部

審査陳列委員長 小島隆三

未だ続くコロナ禍の中で85回展は、なんとか例年と同じ厳正な審査が行われました。マスク着用の静かな中での審査であっても、活気ある景色が戻ってきたことは嬉しい限りです。84回展は、無審査で出品者全員の作品展示ということもあり一部2段掛けの展示となりました。85回展では新制作ならではの“見せる公募展”として、2点入選以外の作品は全て1段掛けとし、どのスペースにおいても余裕のある綺麗な空間展示ができたと思います。

搬入者360名に対して入選者は291名と相変わらず厳選となりましたが、初入選者53名、2点入選者26名と迫力のある質の高い作品がそれぞれの部門で出揃い見応えのある展覧会になったかと思えます。その中で新会員3名、新作家賞7名、絵画部賞7名、SOMPO美術館賞1名が選出されました。

2階展示室では、新制作物故会員であり創立初期から活躍なされた古茂田守介氏と小関利雄氏の絵画部企画「時代を担ってきた作家たち2022」の特別展示とアートレクチャーの講演会が行われました。これからの新制作展を担っていく我々の責任と新制作の歴史の重さを改めて痛感した次第です。

今年も昨年以上に、新制作らしい質の高い作品が集う展覧会になることを楽しみにしております。

#### 彫刻部

審査委員長 杉本準一郎

コロナ禍での新制作展審査は特別なものではあるはずはありません。私達会員、全員での審査は長い長い新制作展のあり方、進み方を決定してきた重要な骨子です。審査する側、審査を委ねる側に位置する関係は異なりますが、同時に表現をする、共に作家であります。

この構図をずっと続けており、審査方法の変更といった問題提起はされていません。彫刻家としての真剣な表現活動の一年を振り返り、新しい制作活動の今を携えながら、同時に審査会に臨むわけです。出品者は、生きる空間、主張する時間と展開の違い等、多様多彩です。審査会は世界に問う彫刻を出品されてくる創作家の方々とは出逢う大切な機会なのです。

陳列担当チーフ 柴田正徳

コロナ禍での展覧会も延期を含め3年目になりました。彫刻部は引き続き画像審査のみの公募を行い、前回とほぼ同数の入選作品を展示する事が出来ました。感染の影響で前回減った会員出品もコロナ以前の数に近くなっています。野外・室内展示ともに粘り強い表現の息吹がジワリと広がる場になっていったと思います。今回、企画として会員の小品展示を行い、図録には掲載せず、テーブル上での集合展示としました。会場構成では、チャリティー・カード販売の場所の復活、そしてSD部の協力により現美術館移行以来、初めて中間の間仕切り壁の変更を行い、新たな景色が生まれました。

#### スペースデザイン部

審査委員長 佐伯和子

審査をしていて一番嬉しいことは見たことのない作品に出会うことである。搬入された時から周りに人が自然と集まり賛否意見が飛び交う。みんな嬉しいのである。

一方、これ去年とどこが違うのだろう、と思われる作品の前はひっそりとしている。

「継続は力なり」という言葉があるが、手を動かし続ける継続ではなく、頭で考え続ける継続を指しているのではないだろうか。作品はideaを証明したくて具体化したものにすぎないと思う。

(審査雑感)

陳列委員長 藤原郁三

今回から彫刻部とのコーナーの仕切り壁をなくしたことにより、展示スペースが視覚的に大きく広がりました。入口から彫刻部の会場まで見渡せるようになり、これまでより開放的な空間になったのは良かったと思います。また、ミニチュールの作品は、従来展示スペースのほぼ中央に置いていたのを、入口近くにまとめたことで、大小の作品が混在することなく、スッキリしたレイアウトになりました。

気がかりなのは、コロナ禍の影響でしょうか、応募作品が小型化しているように感じます。もっとも会員の作品とへだたなく陳列しているので救われているのですが…。迫力ある作品を期待します。

### 新会員紹介



田中直子

新制作展に初めて出会ったのは中学生の頃、広島に巡回されていた新制作展でした。新制作の作品と精神に憧れ、多くの人の支えの中で、新制作展に挑戦し続けることができました。この度、新会員に推挙していただき、身の引き締まる思いで一杯です。ありがとうございました。これからも、常に新鮮で緊張感をもって作品を描いていきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

1959年 広島市生まれ  
1981年 第45回新制作展 初入選  
2015年 第79回新制作展 新作家賞受賞  
2021年 第84回新制作展 新作家賞受賞



仲田道子

55年前上京の際、各公募団体をみて回った中で、憧れ、挑戦、出品したい、は新制作展だった。でもその頃は学生の身で、簡単に出品の挑戦も出来なかった。そんな私が40年を経て新制作展に挑戦出来て会員に。そして今はもう会う事も叶わない一人の友人の後押しと叱咤激励に唯々感謝しかない。

1948年 北海道生まれ  
1971年 札幌大谷短大美術科卒業 同専攻科修了  
2009年 第73回新制作展 初入選  
第81回、第82回新制作展 新作家賞受賞



渡邊啓子

泡をモチーフに 自分の心象風景の表現をしたいと思って作品を作っています。台所の小さな泡から始まりそれが絵の中でも生活の中でもどんどん広がりこんなにも素晴らしい世界を見せてもらえるとは想像すらできず 本当に夢のようです。これも新制作の先生方のご指導のおかげだと心より感謝しています。これからもより良い作品を作れるよう一層精進しようと思っています。

兵庫県生まれ  
2016年 第80回新制作展 初入選  
第83回、第84回新制作展 新作家賞受賞

絵画部



笠井利彦

遠い昔、美術を取り巻く世界には、一種独特な熱気が満ちていました。その熱源の1つが新制作展だったと思います。遠く離れた所に立つ私にもその熱は伝わり、応募のきっかけを作ってくれました。そして月日は流れ、何時の間にかその感覚は麻痺し鈍って来たのかもしれませんが。しかし今気が付けば自分の中に炎を感じます、この熱がどれほどのものか……。小さな炎であっても輝いている限りは制作をつづけて行きます。皆様、宜しくお願い致します。

1954年 高知県高知市生まれ  
1981年 多摩美術大学彫刻科卒業  
1983年 第47回新制作展 初入選  
第82回、第83回新制作展 新作家賞受賞



河合睦子

むかしむかし、この新制作展を知った時、自分が造ったものをここに出せたらなあと思いをしました。それから時が経ち初挑戦、そして初入選、さらに更に時が経ち入賞、その間、会場や懇親会で色々な方から貴重な話を聞く事が出来ました。さて今、会員になった自分が当時の若い私に貴重な話を出来るのでしょうか。むしろ当時の私から話を聞いてみたい気がしています。

1952年 北海道網走生まれ  
1975年 文化女子大学生生活造形学科卒業  
1980年～1982年 アリゾナ州・アーコサンティのブロンズ工房で働く  
1990年 新制作展 初入選  
第82回、第83回新制作展 新作家賞受賞

スペースデザイン部



西野芙佐子

25年間自分が美しいと感じたものや出来事を織り続けてきました。織機の上で縦糸と横糸が平らに交差する織物の制約を利用したり乗り越えたりするワクワク感がたまりません。会員に推挙していただき身が引き締まる思いですがこれからも1年1年ずつ楽しんで作り続けるつもりです。

1939年 東京都生まれ  
2000年 東京テキスタイル研究所で織りを習得  
2005年 新制作展 初入選  
2010年～毎年1回グループ展の参加  
第81回、第84回新制作展 新作家賞受賞



深尾雅子

12年前、初めて新制作展に出会いました。会員の方々のアットホームな雰囲気や適格なアドバイスをいただけることがとても心地よく、ここまで続けることができました。その結果、会員に選ばれたことをとても嬉しく感謝しております。これを新たなスタートとしてさらに制作に励みたいと思っています。

東京都生まれ  
1978年 多摩美術大学美術学部染織科卒業  
1980年 多摩美術大学大学院美術研究科修了  
2011年 新制作展 初入選  
2019、2021、2023年 個展(いりや画廊)  
第75回、第85回新制作展 新作家賞受賞



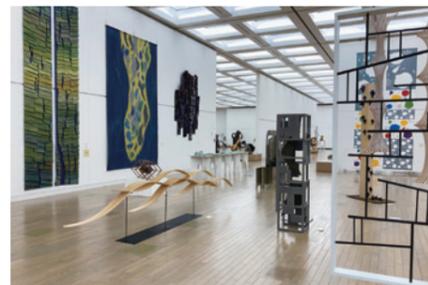
牧野未央

デッサン中に色彩が急に鮮やかに見えた事がありました。またある日はモデルの脇の下から光が昇ってきた事もありました。ある日の服の皺は峰のようでした。ごくたまに訪れる、この感動に出会うために私は彫刻を続けます。作品を通じて感動をお届けできるよう頑張ります。今後ともご指導よろしくお願い致します。

1983年 秋田県生まれ  
2008年 山形大学大学院修了  
2008年 第72回新制作展 初入選  
2011年 筑波大学大学院修了  
第82回、第83回新制作展 新作家賞受賞



カット：高岸昇



## 第85回新制作受賞作家展

新制作展では、優秀作品に協会賞、新作家賞を授与し、受賞者には、当協会各部主催の受賞作家展を企画しています。第85回展の新制作受賞者（協会賞・新作家賞）の展覧会が開催されました。

### 絵画部

シロタ画廊

2023年2月6日（月） - 11日（土）

妹背百代、木滑美恵、小松隼人、関谷泰子、中村葉子、野津智美、藤川妃都美

1. 妹背百代 《ひかりのfugue》 M100号
2. 木滑美恵 《ユダだけでなく-III》 F100号
3. 小松隼人 《GOOD OLD》 91 × 122cm
4. 関谷泰子 《陽ざし》 F60号
5. 中村葉子 《明日へ伝えたいことII》 F100号
6. 野津智美 《うつろう-風-》 F100号
7. 藤川妃都美 《境界》 F100号



1



5



2



6



3



7



4



賞牌

### 受賞者に向けて

たまには庭に出て、夜空に向かって両手を高くあげてみませんか。もしかしたら、星に手がとどくかもしれません。星に願いが伝わるかもしれません。星に想いがひびくかもしれません。願いと想いは流れ星となつていつか手元にとどくはず。第85回展での受賞おめでとうございます。これからも良い仕事を続けていってください。

### 彫刻部

ギャラリーせいほう

2023年1月30日（月） - 2月9日（木）

飯田昌史、稲角新平、上田さや子、黄禹、川崎知子、木村州一、小嶋満明

8. 飯田昌史 《殻XXII》 W45 × D34 × H80cm 石膏
9. 稲角新平 《MULTIVERSE》 W90 × D100 × H160cm ワイヤー
10. 上田さや子 《白い少女》 W21 × D34 × H54cm テラコッタ
11. 黄禹 《反骨嗜好》 W80 × D90 × H130cm 砂・物干し
12. 川崎知子 《向こう側のかぜ2》 W10 × D16 × H13cm テラコッタ
13. 小嶋満明 《「わ」を伴う形》 W110 × D55 × H107cm FRP
14. 木村州一 《晴空-雲外に蒼天あり》 W35 × D40 × H110cm



8



9



10



11



12



13



14

### スペースデザイン部

建築会館ギャラリー

2023年2月5日（日） - 11日（土）

梅田佳津子、公文知洋子、白石千穂、田村純也

15. 白石千穂 《Window》 W120 × D2 × H270 × 2点  
リネン、ポリエステル
16. 梅田佳津子 《ブランク1》《ブランク2》 W50 × D50 × H100 ~ H200 × 4点組  
ステンレスリング、綿糸、絹糸、アクリルモヘア、テグス  
《コントラスト》 W330 × D50 × H50 W50 × D50 × H120  
ステンレスリング、綿糸
17. 公文知洋子 《WORK 23》 W250 × D200 × H300  
藍染綿古布、裂織布、絹布古布、ポリエステル糸、ジュート麻
18. 田村純也 《nisor ニソロ》《nitay ニタイ》《nupuri ヌプリ》《tuk トウク》  
各W12 ~ 32 × D8 ~ 14 × H15 ~ 40  
バルサ、札幌軟石



15



16



17



18

## 第85回巡回展会場風景

### 「京都展」



絵画部



彫刻部パネル展示



SD部パネル展示

### 「名古屋展」



## 表紙作品

### 佐伯和子 《青のブリザード》

2021年  
400×300×250cm  
素材：ナイロンチュール、  
絹、麻、金属



チュールの布の上に、糸や絹綿などをミシンで縫い止めるシートを作ることを思いつき発表したのはこの6年ほど前です。「糸の葉」と名前をつけました。2枚の糸の葉を縫い合わせバネ線を通す道を作っています。つまりこれは組み立て式で、バラすと68本のバネ線と4本の金属芯、みかん箱3つ分くらいのボリュームになります。収納場所や移動手段に苦労してきた結果とも言えます。もし私が大きな作品倉庫を持ち、毎年トラックをチャーターする財力があつたら産まれなかったかもしれません。

スケッチをし模型を作ってもその通りにはならないので、基本は成り行き任せ。活け花のように出来上がってくる意外な雰囲気を楽しむようにしています。

17年前に国立新美術館の設計段階で希望を美術館に聞いていただく機会があり、宙吊りの作品を展示できるようにして欲しいと申し入れ、パーティションレールに引っ掛かる赤いアイボルトを作ってくれました。実現した時はSD展示のフェーズが変わる予感がして嬉しかった思い出があります。

## 巡回展開催案内

### 「第86回新制作展 京都展」

会期：2023年10月31日（火）  
－11月5日（日）  
会場：京都市京セラ美術館（休館日なし）

### 「第86回新制作展 名古屋展」

会期：2023年11月14日（火）－19日（日）  
会場：愛知県美術館8階A,B,C,D室  
（休館日なし）  
会場：愛知県美術館

## 訃報（2023年3月現在）

新制作協会発展に尽力されました故人を偲び、心よりご冥福お祈り申し上げます。

伊藤昌夫氏 絵画部会員  
2022年8月6日 逝去（享年94歳）  
一色邦彦氏 彫刻部会員  
2022年12月14日 逝去（享年87歳）

## 編集後記

コロナ禍が続く中でも84回、85回展が無事開催され、今年はこれから86回展を迎えようとしています。限られた紙面の「会報」ではありますが、対面での交流が少なくなった今、新制作に関わる皆様を繋ぐための一助になればと考えております。

今号も、お忙しい中原稿執筆をお引き受けくださいました方々に深く感謝申し上げます。（雨山）



新制作協会事務所  
〒160-0022  
東京都新宿区新宿6丁目28番10号  
大阪屋ビル202号  
TEL：03-6233-7008 FAX：03-6233-7009  
Mail: webmaster@shinseisaku.net  
www.shinseisaku.net

発行 新制作協会  
発行日 2023年5月

監修 永津守  
企画・編集・制作 広報委員会広報誌編集委員  
小島隆三、山口都、岡孝博、  
新美正樹、雨山智子  
デザイン SHIMA ART&DESIGN STUDIO